

2021 年度森泰吉郎記念研究振興資金 研究者育成費（修士・博士）
成果報告書

研究課題名：自然との関わりを土台として子育ての研究

氏名：安藤日向子

所属：政策・メディア研究科 修士課程 1 年

研究概要

本研究は、自然との関わりを土台とした子育て・保育・幼児教育のやり方を「Nature-based Childhood Care（以下 NbCC）」と名づけ、生き生きとした実践を育むために必要となる行為と工夫を明らかにするものである。具体的な問いは、子育てにおいて、どのように草木山川などの自然環境や生きものに関わることで、子どもとともに自分らしいありのままの自然を育ていくことができるのか、である。パターン・ランゲージの作成を通じた質的研究手法をアプローチとした。今学期は、NbCC の実践を可能にする 3 つの成長の観点と 27 個の経験則を抽出した。

研究実績

- “Principles of Pattern Illustration Design,” Takashi Iba, Yuka Banno, Hinako Ando, 26th European Conference on Pattern Languages of Programs, July 2021.
- “How to Make Patterns Powerful: Realizing Contrast in a Pattern of a Pattern Language,” Takashi Iba & Hinako Ando, 28th Conference on Pattern Languages of Programs, January 2022.

2021 年度の研究活動内容

本研究は、パターン・ランゲージの作成を通して経験則を明らかにした。研究活動は以下の通りである。

- 2021 年 3 月~10 月：NbCC 実践者の非構造化インタビュー調査（図 1）
- 2021 年 6 月~現在：山奥の集落（石徹白）で自らの NbCC の実践を対象としたオートエスノグラフィー調査（図 2）
- 2021 年 6 月~10 月：調査結果を分析し、経験則を明らかにした
- 2021 年 11 月：経験則の体系化
- 2021 年 11 月~現在：経験則の言語化

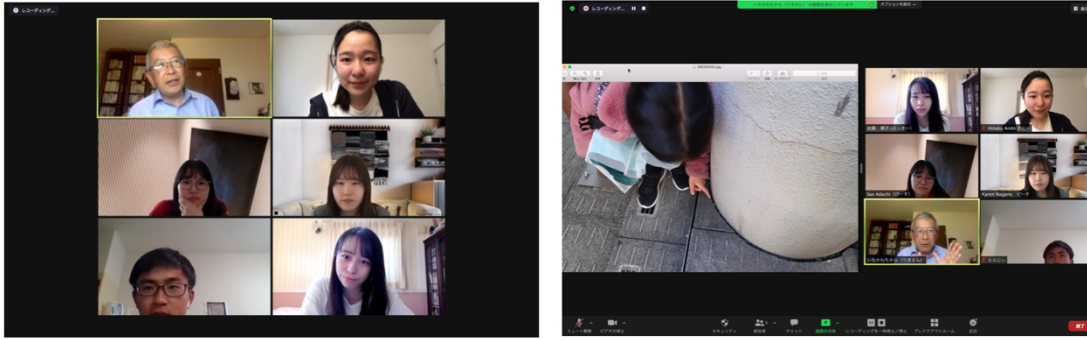


図1 非構造化インタビュー調査の様子



図2 オートエスノグラフィー調査の様子

研究成果

1. 3つの成長の観点

NbCCの実践に必要な3つの成長の観点を明らかにした。(1)心と身体の世界が合わさることによる成長 (2)子どもと大人の世界が合わさることによる成長 (3)人間と自然の世界が合わさることによる成長、である。NbCCの実践では、【子ども-自然環境-大人】のトランザクションにより、子ども、大人、自然環境の3者がともに育ち合うことが大切にされている。それぞれ分離して捉えているものを統合して捉えることで、豊かなNbCCの実践が支援されることがわかった。

2. 27個の経験則

3つの成長の観点の実践を支える27個の経験則を明らかにした。それぞれの観点到9つずつ、配置される。全体像(図1)と、それぞれの経験則(表1, 2, 3)は次頁以降に紹介する。

心と身体			子どもと大人			人間と自然		
原初感覚	内なる光	生きていく力	今を大切に	歩み寄る	世界に出会う	関係を紡ぐ	循環に生きる	命のつながり
太陽のリズム	軸となるお約束	はじめの徹底	一緒にいる時間	まずは自分から	観察対話	たびたびの訪れ	育てて食べる	じっくり感謝
でこぼこ道	伸びるタイミング	最低限の道具	たのしさの優先	ほかほかの内	一つひとつの感覚	おそとの生活	旬に合わせる	—
衣食住の遊び	本人に聴く	リスクのイメージ	おもいで記録	子どもの見方	おもいつき仮説	物語のなか	お礼のお手入れ	—

図3 経験則の全体像

表1 「心と身体の世界が合わさる」の経験則

《太陽のリズム》	状況	子どもとともに暮らしている。
	問題	一生懸命にやっていることがあると、ついつい時間が過ぎてしまい、寝る時間が遅くずれ込んでしまう。
	解決	起きて食べて寝る時間を、太陽のいちにちの動きに合わせて立てることで、からだの本来のサイクルにあった、暮らしのリズムをつくっていく。
《でこぼこ道》	状況	子どもと外で過ごしている。
	問題	歩きやすつくられた地面のあるところにいると、からだの動きが少なくすむ反面、本来必要な全身の動きが日常で身につかなくなってしまう。
	解決	坂や凸凹などがある、整備されていない場所を普段から探して行くことで、微細な変化や形に対し、からだをいっばいに動かしていく。
《衣食住の遊び》	状況	外での遊びを楽しみたい。
	問題	遊びかたの決まった遊びばかりをしてしまうと、ルールに気が取られてしまい、楽しみに制限がかかってしまう。
	解決	生きるために欠かせない、食べること、着ること、住むことにかかわる遊びをすることで、内側から湧き立つ楽しさのままに遊ぶ。
《軸となるお約束》	状況	子どもの行動を気にかけている。
	問題	気をつけることを思いつくたびに伝えていっていると、気にすることが多く感じられ、子どもに窮屈な感じを与えてしまう。
	解決	今の子どもにとって本当に大切なことを吟味して伝えることで、必ず守るべき最小限のことだけを、子どもとしっかりお約束する。
《伸びるタイミング》	状況	子どもが何を求めているのか考えている。
	問題	どれだけ時間をかけても、自分の感覚や世の中のあたりまえをもとにするだけでは、人とは異なる、その子ならではのペースや求めていることからずれてしまう。

	解決	子どもの興味がどのようなことに向いているのか、視線の先を追いかけることで、その子のタイミングで、その子が必要としていることを把握する。
《本人に聴く》	状況	子どものことを考えている。
	問題	自分の感覚で子どもがやるとよいことを判断していると、その子が求めていることを自分で考え見つけることができなくなってしまう。
	解決	子どもがどのようにしたいかを、本人に聴いてみることで、子ども自身の思いや希望を確認する。
《はじめの徹底》	状況	子どもがやってみようとしていることに、危なっかしさがある。
	問題	怪我や事故がないように子どものやることを止めてしまうと、同時にその子の挑戦もとめてしまう。
	解決	安全に過ごすために気をつけるべきことをはじめる前に徹底して押さえることで、その子が安心して使えるベースをつくっておく。
《最低限の道具》	状況	暮らしに必要な作業に取り組んでいる。
	問題	便利な器具を使ってばかりだと、作業をこなすために必要な力が身につかず、道具なしで何もできなくなってしまう。
	解決	道具を最低限のシンプルなものに揃えておくことで、まずは自分たちの手指を使い、あるものを工夫して仕事をする。
《リスクのイメージ》	状況	子どもの挑戦してみたいという勢いや気持ちを大切にしたい。
	問題	何が危険か漠然と捉えているだけだと、いざというときに自分で対応できないまま、不安だけが膨らんでしまう。
	解決	周囲をよく観察して、どこに危険が起こりうるか事前に確認しておくことで、身を守るために必要な対応をイメージする。

表2 「子どもと大人の世界が合わさる」の全体像

《一緒にいる時間》	状況	子どもとの時間を過ごしている。
	問題	子どもを大切に思っても、生活を送るための日々の仕事に追われていると、気づけば時間は過ぎ去り、子どもと向き合う時間を逃してしまう。
	解決	過去や未来のことは一旦脇におき、目の前の子どもと今を過ごすことで、子どもとの時間に身を浸し、大切にする。
《たのしさの優先》	状況	子どもの一瞬一瞬を大切にしている。
	問題	子どもの成長を考えていると、その子を支える側に回ってしまい、同じ気持ちでその時間を過ごすことができなくなる。
	解決	自分も子ども、この場を楽しむことをまず第一にすることで、子どもとともに本気でその場の遊びにのめり込む。

《おもいででの記録》	状況	心に響く子どもの瞬間があった。
	問題	今はこの感動を味わうことができても、時が経ち、他の経験も重なっていくと、どうしても忘れてしまったり、薄れていってしまう。
	解決	心に響いたことを感覚がありありと残っているうちに、写真や短い文にまとめておくことで、子どもと過ごす今この瞬間を残しておく。
《まずは自分から》	状況	子どもに勧めたいこと、やって欲しいことがある。
	問題	一方的にやってほしいことを伝えるだけだと、ただ押しつけのような関わり方になってしまう。
	解決	まずは自分から行動を変えてやってみることで、自分の姿からそのことの良さや大切さを伝えていく。
《ほかほかの内》	状況	子どもが新たな発見に出会っている。
	問題	一緒に過ごしていても、それぞれ違うことをやっていると、子どもが気にしていることに気がつかないまま、ばらばらに時間が過ぎてしまう。
	解決	子どもが発見をしたときに一旦止まって、子どもの見つけたことに自分も見てみることで、そのときの喜びや感動をともにする。
《子どもの見方》	状況	その子らしい、面白い反応を示している。
	問題	まわりの世界を自分の視点から捉えているだけでは、その子の反応がどのような意味を持つのか、わからない。
	解決	子どもの反応を手がかりに、その子の世界の見方を想像してみることで、子どもの視点から、その子の見ている世界を感じとる。
《観察対話》	状況	子どもと自然のなかを楽しんでいる。
	問題	お互いの思っていることや感じていることについて話していると、それぞれのことを知ることができても、目の前にある自然に目を向けていくことができない。
	解決	目の前にあるものについて気づいたことを伝え合っていくことで、一緒に自然を観察していく。
《一つひとつの感覚》	状況	自然のなかで過ごしている。
	問題	触れるものがどのようなものか、知識として理解しているだけでは、そのものの一側面を理解しただけにとどまってしまう。
	解決	目・鼻・肌・舌・耳、それぞれの感覚に触れるものをじっくり感じてみることで、様々な感じ方を通して多方面から世界と向き合っていく。
《おもいつき仮説》	状況	不思議なものとの出会い、疑問が芽生えた。
	問題	子どもに正解を教えてあげようと、既存の情報に当たっているだけでは、世界に知識を通してしか向き合っていくことができない。
	解決	常識とされていることを一旦脇に置き、自分なりに疑問に対する仮説を考えてみることで、自分の視点を持って世界に向き合っていく。

表3 「人間と自然の世界が合わさる」の全体像

《たびたびの訪れ》	状況	日常を離れて、自然のあるところにお出かけに行っている。
	問題	毎回新しいところに訪れていると、その場の環境に浸かりきれないまま、その場との関係が一度きりで終わってしまう。
	解決	同じところへ何度も繰り返し訪れることで、心から親しみを感じられる場所を見つけていく。
《おそとの生活》	状況	自然のなかで一緒に時間を過ごしている。
	問題	自然をただ遊ぶ場所として捉え、訪れているだけでは、その限られた時間のなかで触れられる自然の姿しか知ることができない。
	解決	いつも家でやっていることを外でやってみながら一日を過ごすことで、自然のなかでその日の暮らしを育んでみる。
《物語のなか》	状況	自然とさらに交流を深めたいと思っている。
	問題	自分たちだけで自然に接していると、自分たちの文脈の中でしか自然と触れ合うことができない。
	解決	自然を舞台にした物語の話を取り入れながら自然に訪れることで、今まで知らなかった新しい世界観をもとに、想像を膨らませながら自然に触れていく。
《育てて食べる》	状況	日々の食事をとっている。
	問題	食べたいものを外から入手していると、自分たちが食べるものが本来どのような姿であるか、食べるということがどのような意味を持つことなのか知ることができない。
	解決	野菜や果物を自分たちで育てて食べることで、食べものをいただくひと通りの過程を、身をもって体験する。
《旬に合わせる》	状況	日々の暮らしに必要なものを揃えている。
	問題	すでに完成されたもので囲まれた環境では、日常のなかで、移りゆく自然を意識することができない。
	解決	暮らしに必要なものを、身近な自然にあるものからとってつくってみることで、自然の巡りを直に感じられる生活を送る。
《お礼のお手入れ》	状況	日常的に自然と関わっている。
	問題	自然の恵みを一方的に享受していると、知らぬ間に自然の場を傷つけてしまうことがある。
	解決	身近な自然のお手入れを行うことで、お世話になっている場所への感謝を形に表していく。
《じっくり感謝》	状況	さまざまな存在に支えられ、今もこうして生きている。
	問題	機会がないと、あたりまえにいただいている支えに対し、ありがたみを実感できないことがある。
	解決	大切なものをいただくたびに、しばらく目を閉じて感謝することで、自分たちを生かしてくれるものに対して、じっくり思いを寄せて行く。
(未定)	状況	

	問題	
	解決	
(未定)	状況	
	問題	
	解決	

謝辞

森泰吉郎記念研究振興基金は研究に必要な書籍に使わせていただきました。安心して研究活動に務めることができました。ご支援頂きましたことを誠に感謝申し上げます。